

お茶うけ 第34話

アメリカの砂漠

この11月の始めに急に思い立って、夫婦でアメリカのアリゾナ州を旅行しました。テーマは、「先住アメリカ人(アメリカ・インディアン)と砂漠」です。アリゾナの砂漠を車で案内してくれるツアーを選んで申し込みましたが、どんな旅行になるのか心配でした。しかし、今度の旅行は、太平洋を渡る往復の飛行機便のどちらにも変更があって、多少慌てた他は、全てに満足できた楽しいものでした。

アリゾナのフェニックスの空港で、私達夫婦はスコットさんという好青年の出迎えを受けました。日本に3年間住んだことがあるというスコットさんは、流暢な日本語で、私達二人のツアーの担当で、他に客はいません、新車のワゴンで広いアリゾナの砂漠を案内しますと話しました。これは楽しい旅になるなと、すっかり嬉しくなりました。

早速スコットさんに頼んで、ツアーのオプションとして、フェニックス市内の「ハード (Heard)博物館」(先住アメリカ人の文化と芸術を展示)に案内してもらい、その晩は近くのスコッツデールで泊まりました。次の日から3日間、朝8時に出発して途中の見学をこなしながら、夕方の6時~8時にホテルに着くという強行軍でした。

主な観光地として、「化石の森国立公園」、「キャニオン・デ・シェイ国立モニュメント」、「モニュメント・バレー」、「グランド・キャニオン国立公園」を見、フォーバードムを通して、ラスベガスに着きました。見渡すかぎりの原野が一日中続くフェニックスからラスベガスまで、全行程ざっと1,500Kmを走り終えて、改めてアメリカの大きさを実感しました。

私どもが走ったアリゾナの砂漠は、アリゾナ高地(アリゾナ州の東北から南西に広がる幅100Km、高度2,500m前後の山稜地と盆地)にあります。ここは、アフリカのサハラ砂漠などと違って、年間の降雨量は100mm以上あるので、全くの不毛の地ではありません。しかし、雨が少ないので、広い原野にサボテンや各種の灌木などが疎らに生えるだけの、人が生活するには厳しい環境なのです。

先住アメリカ人は、これらの植物をさまざまに活用して生活してきました。他に客がないので、私達は車窓から見える砂漠の植物について、スコットさんに自由に質問することができました。またスコットさんも国立公園などの中を歩きながら、木や草を手取るようにして説明してくれました。砂漠の植物がどのように活用されるのかを、スコットさんの説明を元に書いてみます。

- **Giant Saguaro**: スワロウと発音する。大型サボテンで西部劇の舞台でお馴染みの背の高いサボテンである。日本では、弁慶柱サボテンとも言う。少しづつ成長し、1本の枝を出すのに70年かかる。寿命は200年と言われる。自分の背丈程の長い根を深さ50cmのところを張り巡らして雨水を集める。
- **Prickly Pear Cactus**: サボテンの一種、刺のある梨の意味か。何枚もの掌 (pad) 状のものが生える。丸々とした実と pad は食用になる。実は赤色や黄色の染料にする。また pad を傷口に当てて出血を止める。茎は接着剤の役目をする。
- **Narrowleaf Yucca**: イトラン属、龍舌蘭に似ている。先端が尖った細く強靱な葉が根から密生する。一本の茎に白い花が咲く。実は食用と染料になる。葉の繊維で籠を編む。根は石鹸になる。
- **Sage brush**: 銀緑色の葉を持つ灌木。強い匂いが特徴。実は食用の香料として使う。お茶は胃の病を治す。実は黄金色や銀緑色の染料にする。根、実、枝の房をヒーリング治療に使う。(セージには、サルビアの葉、薬用・香料の意味あり)

先住アメリカ人は、先祖からの土地で、植物、動物などと共生の生活しながら、独自の文化を創り育ててきました。今度の旅行の前に知人から、地球の環境問題が全人類の課題になった今、先住アメリカ人の自然との共生の生活を学ぼうという動きがあると聞きました。広大なアメリカの原野に住む彼らの電気もないような生活と、旅行の終着点のラスベガスの目も眩むばかりの電燭に輝く夜景との間の、あまりにも大きい落差に、私は言葉を失っていました。

以上

